

近代化論の可能性

——外なる近代から内なる近代へ——

東京大学 佐藤俊樹

1.近代化論の視線

伝統的には、近代化論は、外部の参照点との距離をつかって内部を反省する枠組みであった。その代表例はいうまでもなくウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」である。1905/6年の雑誌版発表以降、さまざまな展開可能性をはらんで改訂されていくこの論文は、基本的な主題の一つとして、ドイツという"nation"の定位(=位置&方向づけ)をもっていた。具体的にいえば、プロイセンによって統一された新たな「ドイツ」の基軸としてプロテスタンティズムをおいた上で、そのなかのどの派が真の「心理的起動力」をもちうるのか。その問いへのウェーバーなりの答えがこの論文だった。

ウェーバーはそこでルター派ではなく、カルヴァン派(改革派)と洗礼派系諸派をとりあげる。そこには同じドイツ語圏でも、ハイデルベルクをはじめとする西南部と東北部の対立をみることができるが、ウェーバー自身はドイツではそもそも禁欲的プロテスタンティズムが十分に展開されることはなかった、とする。彼が名指す真の近代はイングランドである。イングランドードイツという対立が、ドイツ内部の西南ー東北、あるいは禁欲的プロテスタンティズムルター派という対立に二重写しにされる。外と内との関係が内の内部で反復されるのである。

伝統的な近代化論は基本的にこの構図をとってきた。外の参照点は当時の世界の中心であり、すべての社会がそこに向かって進化または変化するという意味で、極点にあたる。いわばその極点を原点とする極座標系で、全ての社会は位置づけられる。

それゆえ、近代化論は中心=極点以外に位置する社会においては、自らの内部を反省する枠組みであるとともに、中心=極点に位置する社会にとっては、自ら以外の社会を一般的に評価する枠組みになる。それゆえ、この近代化論では中心=極点に位置する社会は実質的に語られない。極点に位置づけられた社会にとって、自らは不動の定点だからである。A・マクファーレンらが、イングランドは近代以前からずっとイングランドだったと語り、アメリカ合衆国社会がピューリタンの入植を最も純粋な近代として追想しつづけるのはおそらくその variant であり、だとすれば、J・ハーバマスの「未完の近代」は、その空間座標系を時間軸にそって言い換えたものだと考えられる。

2.

現時点で起きているのは、この伝統的な近代化論が魅力を失ったという事態である。ウェーバーの「倫理」論文も、ハーバマスの「未完の近代」ももはや広い共鳴をひきおこさない。近代化論は中心=極点を失ってしまった。

もちろん、それによって従来の近代化論が全て失効したわけではない。例えば、中心=極点へむかう運動を、時間的に収斂するものとせず、むしろ中心=極点からの距離という差異にもとづく世界システムとして考えることもできる。追い上げと移転のモデルである。中心=極点にある先進産業社会に対して、後からさまざまな産業社会が追い上げてくる。そこには時間差があり、その時間差を応じて分業体制が組まれる。具体的にいえば、中心から周辺へと、軽工業、続いて重工業の生産拠点が移転していく。移転先の社会はより安い工業製品の供給基地として輸出競争力を強めて、中心に近づく。すなわち、人口構造の転換をとめないながら「豊かな社会」に近づいていくが、その距離が縮まるにつれて、接近速度は急激に低下していく。その結果、福祉国家のしくみを持続可能な形で確立できないままに、高齢化を迎えていく。

おそらく台湾と韓国がそうなりつつあり、中国もまたほぼ確実に「未富先老」社会になるだろうが、現在の日本も巨額な国家債務が示すように、その少し先でよく似た途を歩きつつある。その点でいえば、西ヨーロッパを真の中心=極点として、そこに一番近い準中心が先進国的中進国(あるいは中進国的先進国)として「大国」的ポジションを占めるという、20世紀の世界システムの体制は基本的には維持されているのかもしれない。

しかし、そこにも変化は訪れつつある。そもそもこうした世界システムは、伝統的な近代化論には登場してこない。全ての産業社会が先進国に、そして福祉国家に、すなわち真の中心=極点になりうると思われてき

たからだ。その魔法の鍵に擬せられてきたのは科学技術である。その力によって資源の希少性も、エネルギーの希少性も、そして労働力の希少性も最終的には解消される。「鉄腕アトム」的世界が想像されていた。

3.

その点に注目すると、科学技術の進歩という魔法の呪文は近代化論にとって「隠れた主役」あるいは「機械仕掛けの神 *Deus ex Machina*」であったことに気づかされる。

科学技術の進歩によって、全ての産業社会が先進国になれる。それは裏返せば、科学技術の進歩によって、それぞれの産業社会がたどってきた経路、具体的には産業化の開始時点やそれ以前の社会の形態の影響力が消去できる、ということだ。すなわち、科学技術の夢は、それぞれの産業社会の経路依存性を失効 *cancel out* する。

それゆえ、その夢がはじけることは、産業社会の経路依存性が復活することである。先の世界システム論的とらえ方も、もちろんその一つだ。そこでは、産業化の開始時点が影響力の強い決定変数として残り続ける。

経路依存性を当事者視点でいいかえると、「社会は時間的な厚みをもって成立する」ということだ。そこでは社会は3次元の空間連続体ではなく、4次元の時空連続体として主題化される。全ての産業社会はそれぞれ固有な時空連続体であり、その意味で、あるいはその意味においてのみ対等であるといえる。

そのことはいくつかの帰結をもたらす。一つは「歴史」への敏感さである。それは対内的には「自らの内側に堆積した歴史」への関心となるが、対外的には「遅れ」への痛切な自覚と不当感として噴出する。先ほどの世界システム論状況を最も強烈に展開している東アジアが、それこそ日本もふくめて、「外からの力で歪められた自ら」という自己意識を痛烈にもちつづけるのもその現われではないだろうか。

と同時に、経路依存性は決定論を意味しない。それぞれの過去に選択的な分岐点があり、現在もまた分岐の途上にある。現在の日本でいえば、団塊の世代への社会福祉をどうするかが今後数十年にわたってこの社会の行方をきめる分岐点の一つになるかもしれない。

現在の多くが過去の分れ途の帰結であり、未来の多くが現在の分れ途の結果として生じる。そして何がどう生じるかは、神様視点からは固定できるとしても、現在の人間には見通すことができない。こうした社会のあり方をやはり現在の流行語で言い換えるのならば、「リスク社会」になる。確率的な言明を通じてその分岐を予測していくしかない社会、にもかかわらず現在と未来の多くがその分岐に依存していると考えざるをえない社会、というわけだ。

そして、もしどの分岐が何と何への分岐かの特定も限定されたデータによる不確定な推定にとどまるとしたら（もちろんこれは新たな仮定だ）、現在もまたその意義を固定できなくなる。たんに現在が「他でもありえた」ものであるだけでなく、どこからどこへが自明に固定できないという点では、「他のものとも読みうる」ものともなる。自省する社会で複数の自省を許容すれば、社会そのものが複数化する。より正確に言えば、複数化したとらえ方が可能なように、社会そのものが仮想化 *virtualized* される。

4.

ここまで語ってきた内容に既視感をおぼえた人はいるかもしれない。その通りで、これらはN・ルーマンの『社会の社会』の第5章「自己記述」で論じた内容を、私なりに翻案したものだ。

その意味でいえば、社会学における近代化論はまだ生きている。近代は依然として我々にとって最も重要な問いである。ただし、それは社会学をも巻き込んだ問いになっている。近代化論の転換において、最も転換を強いられるのは社会そのものをどうとらえるのか、あるいはどう語りうるのか、だからである。